

# アブラツノザメ 日本周辺

North Pacific Spiny Dogfish, *Squalus suckleyi*



## 管理・関係機関

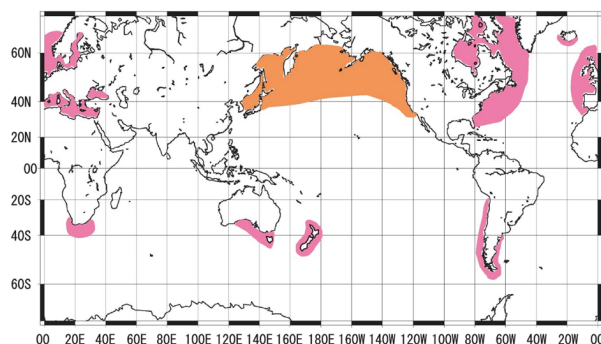
なし

## 生物学的特性

- 体長・体重：雌：全長 120 cm・13 kg、雄：全長 95 cm・4 kg
- 寿命：60 歳以上
- 成熟開始年齢：雌 23 歳、雄 14 歳
- 繁殖期・繁殖場：2～5 月、繁殖場は調査中
- 索餌期・索餌場：調査中
- 食性：魚類、頭足類
- 捕食者：東北地方太平洋岸沖のマダラの胃内容物として出現

## 利用・用途

第 2 次世界大戦前後は、ビタミン A、肝油の原料としてかなりの需要があったが、合成ビタミン A の普及によりアブラツノザメ漁業は衰退した。東北地方では刺身や煮物、照り焼きなどで食されるほか、ちくわ等の練り製品原料として利用される。また、近年、肝油やさめ軟骨エキスなど健康補助食品の原料の一つになっている。



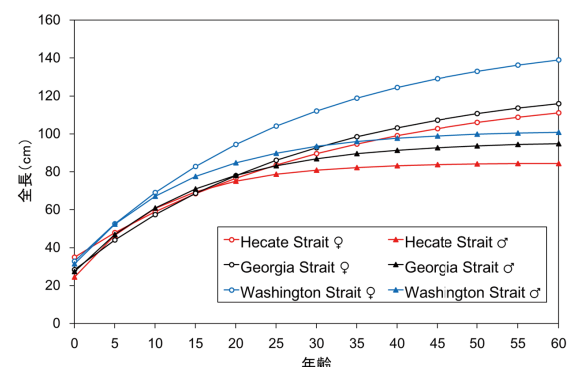
アブラツノザメ類の分布（阿部 1986 を改変）  
オレンジ色：*Squalus suckleyi*、ピンク色：*S. acanthias*

## 漁業の特徴

北日本の太平洋側や日本海側では、かなり古い時代から漁獲されていたが、漁獲対象として注目されるようになったのは明治 30 年代末頃からであり、北海道、青森、秋田、石川県などで当初はマダラなどを対象とした底はえ縄漁船の兼業対象種として漁獲された。その後、昭和初期に機船底びき網で漁獲されるようになった。太平洋戦争後は食糧増産政策に伴い主に機船底びき網により積極的に漁獲され、漁獲量が増加した。その後、本種の漁獲量は、1950～1960 年代の合成ビタミン A の普及による国際取引の減少とそれに伴う魚種単価の下落により急激に減少した。現在、本種の主な漁獲は、以前に比べて同種を主対象とした操業が減少した沖底と本種を漁獲対象とする底はえ縄漁業により行われており、さめ類全体の漁獲量より推定した本種の漁獲量は 1990 年以降 2,900～4,600 トンで比較的安定して推移しており、2016 年は 3,100 トンであった。

## 漁獲の動向

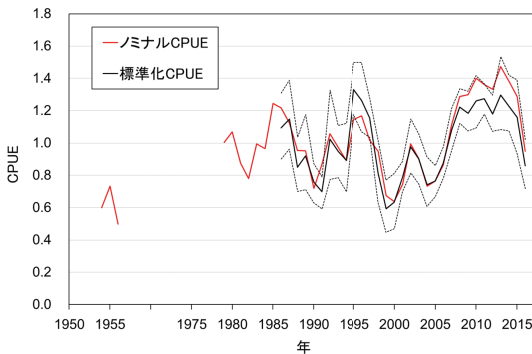
資源状態の指標値として、1972 年以降の沖底漁獲成績報告書から集計した太平洋北区のかけまわし（1 そうびき沖底）の CPUE と、主要な漁場である津軽海峡周辺における 1979 年以降の青森県の底はえ縄による漁獲量及び延べ操業隻数から求めた CPUE を用い、資源の動向を検討した。太平洋北区においてアブラツノザメの漁獲が多いのは襟裳西～尻屋崎海区で操業する青森県のかけまわしである。かけまわしによる CPUE は 1972 年以降 2000 年ごろまで減少傾向が認められたが、それ以降は近年に至るまで横ばい傾向にある。分布域の中心にあり、アブラツノザメを狙った操業が行われている津軽海峡内の底はえ縄では、近年の CPUE が 2000 年代前半の約 140% の水準を示しているが、過去 5 年の CPUE には減少傾向が認められる。さらに、底はえ縄の 1979～2016 年のノミナル CPUE（標準化されていない CPUE）は、1954～1956 年に比べて高い水準にある。



カナダ西岸のアブラツノザメの雌雄別海域別年齢－全長関係  
(Ketchen 1975 より作成)

資源状態

太平洋北区のかけまわしの CPUE 及び日本周辺海域において本種の分布の中心に近いと想定される津軽海峡内で本種を漁獲する底はえ縄漁業の CPUE の解析結果から判断すると、日本周辺における近年のアブラツノザメ資源は中位水準にあり（CPUE の過去最大と 0 を 3 等分し、上から高位、中位、低位とした場合、かけまわし及び底はえ縄の CPUE はともに中位と評価）、東北太平洋側では横ばい傾向、津軽海峡では減少傾向と判断されるが、津軽海峡の減少については長期的な増減から判断して変動の範囲内と考えられる。

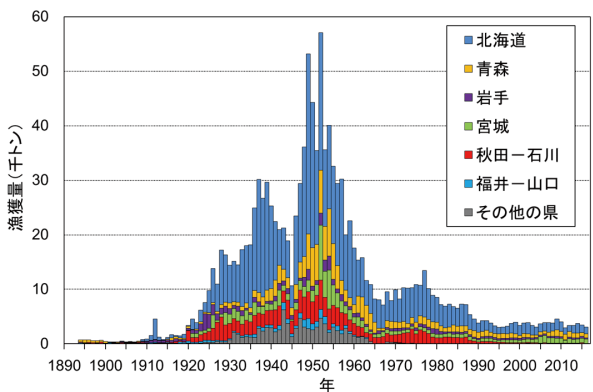


津軽海峡内で操業を行う底はえ縄のノミナル CPUE（標準化されていない CPUE）と標準化 CPUE

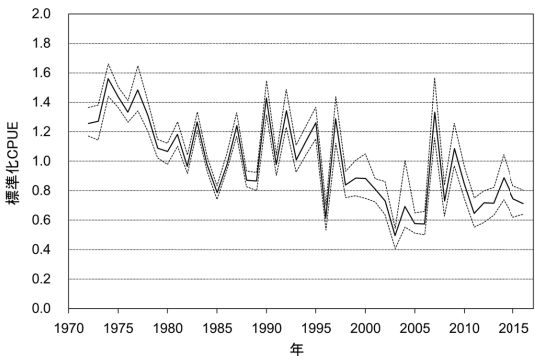
1986 ～ 2012 年の三厩および 2007 ～ 2016 年の大間の漁獲データを用いた（各 CPUE は 1 が平均値となるように基準化、破線は 95% 信頼区間の上限値と下限値）。

管理方策

津軽海峡で操業を行う底はえ縄漁業者により小型魚や出産への貢献度が高いと考えられる高齢魚の再放流及び漁獲量上限の設定など、資源保全に向けた自主的な取組が行われているが、公的な管理方策は実施されていない。なお、2007 年のワシントン条約第 14 回締約国会議及び 2010 年の第 15 回締約国会議では、EU から附属書 II への掲載が提案されたが採択されず、その後掲載提案は行われていない。



さめ類漁獲量から推定したアブラツノザメの漁獲量



太平洋北区における沖底（かけまわし漁法）の標準化 CPUE（標準化 CPUE は 1 が平均値となるように基準化、破線は 95% 信頼区間の上限値と下限値）

アブラツノザメ（日本周辺）の資源の現況（要約表）

資源水準	中 位
資源動向	横ばい（東北太平洋側） 減少（津軽海峡）
世界の漁獲量 （最近 5 年間）	—
我が国の漁獲量 （最近 5 年間）	3,077 ～ 3,742 トン※ 最近（2016）年：3,077 トン 平均：3,387 トン（2012 ～ 2016 年）
管理目標	検討中
資源評価の方法	かけまわし及び底はえ縄の CPUE に より水準と動向を評価
資源の状態	検討中
管理措置	検討中
最新の資源評価年	—
次回の資源評価年	—

※漁獲量は全国のおさめ類漁獲量と過去のおさめ類に占めるアブラツノザメの平均的な割合から推定した値（2016 年は暫定値）